

令和元年6月29日現在

機関番号：84419

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16657

研究課題名(和文) 中世絵画史における白描画像の位置

研究課題名(英文) The place of Buddhist iconographic picture in medieval Japanese painting history

研究代表者

古川 攝一 (Furukawa, Shoichi)

公益財団法人和文華館・その他部局等・学芸部員

研究者番号：70463297

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：平安時代後半から盛んに制作された白描画像を表現の点から分析を行い、白描の手法によって描かれた歌仙絵や物語絵と比較することで、画題と表現とに相関性があることを明らかにした。さらに、鎌倉時代に流行する肖像表現である「似絵」の発生、および仏画における水墨技法の受容の問題について、白描画像からアプローチを行い、その一端を画像が担った点を明らかにした。一方、画像の描き手の観点から画僧、絵仏師、宮廷絵師を比較対象とし、画僧の特色や三者の違いについて明らかにした。また、個々の画像や仏画例から得られる情報を整理することで、白描画像を介した人的ネットワークが機能していた点を明らかにすることが出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

平安時代後半に数多く制作された密教画像の高い芸術性に注目することで、日本絵画史における白描画の現存作例と比較を行い、仏画のみならずやまと絵にも影響を与えたことを明らかにした。密教画像の集積は中世絵画を育む土台となる重要な位置を占めていることが理解され、従来の歴史的価値による評価だけでなく、美術的にも高い価値を有していることが判明し、絵画資料群として学術的に高い意義を有していることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The Buddhist iconographic pictures which sketched in ink, (Hakubyo-zuzo) were widely produced in the Heian period. By focusing on the way of painting of Hakubyo-zuzo and by comparing the paintings of portraits of poetic immortals, (Kasen-e) and the narrative paintings, (Monogatari-e) drawn using the hakubyo technique, I indicated the existence of an interrelationship between the subjects and their expressions. In addition, through Hakubyo-zuzo, I approached the development of Nise-e portrait representation and the reception of ink paint techniques in Buddhist paintings, which indicated the role that these images played. On the other hand, a comparison of artist monks, Buddhist painters, and court painters from the painter's perspective illuminated characteristics of artist monks and differences among the three types of painters. By arranging information gained from the inscription on Hakubyo-zuzo, I was able to elucidate a part of the human network existing through Hakubyo-zuzo.

研究分野：仏教絵画史

キーワード：密教画像 白描画 仏教絵画 美術史 画僧 絵仏師 画像学

1. 研究開始当初の背景

白描図像は東寺、高山寺や醍醐寺の聖教類に納められるものが多く、密教経典や儀軌を補完するものとして重要視され、その研究は戦前からなされてきた。『大正新脩大蔵経図像部』や大村西崖による『仏教図像集古』（仏書刊行会、1922年）の刊行は、その後の仏教学、国語学、国文学、美術史学研究の基礎資料となった。美術史学では、図像集の成立過程や収録された図像の特徴、個別の作品研究がなされてきた。佐和隆研『白描図像の研究』（法蔵館、1982年）に代表される。また、中野玄三氏は、白描図像の持つ高い観賞性に着目した展覧会を開催し、その成果は『特集陳列 密教図像』図録（京都国立博物館、1979年）として公刊された。白描図像を絵画として捉え、その芸術性を評価する論考は、有賀祥隆「白描図像 その伝承性そして資料性と芸術性について」（『密教美術大観 第一巻』朝日新聞社、1983年）や、錦織亮介「図像と鏡像 線だけの尊像表現」（『曼荼羅と来迎図 日本美術全集 7』講談社、1991年）へと続いていく。

一方、林温「桜池院蔵薬師十二神将像と薬師如来画像 南都仏画考二」（『仏教芸術』203、1992年）をはじめとした一連の論考では、白描図像と著色仏画の密接な関係が提示された。描かれた図像の尚古性、地域性、時代性に着目し、平安時代末期から鎌倉時代にかけての南都周辺で制作された仏画研究に新たな視点をもたらした点は評価される。しかし、一連の考察は、あくまでも著色仏画に焦点を当てた個別の作品研究で完結したものである。これらの成果と白描図像の先行研究を一つ一つ関連させ、図像・制作者・発願者・制作背景にどのような結びつきが認められるのかにまで視野を広げ、白描図像を軸に個々の仏画作例を捉え直す研究は、未だなされていないのが現状であった。

本研究代表者はこれまで、集合図像と称すべき、複数の尊像を一つの画面に再構成して描き出された仏画について考察を重ねてきた。すなわち、特定の経典や儀軌に基づいた造像ではなく、発願者や制作を主導した学侶の個人的な信仰や思想を強く反映したものである。このような作例が、教学復興期の東大寺周辺に端を発し、鎌倉時代以降、数多く描かれるようになることに着目し、作品調査及び考察を重ねた。その結果、平安時代後半に集積された白描図像が、経典の規範に縛られない、学侶や発願者の個人的な思想を反映した仏画制作の原動力となった点が明らかとなった。さらに、白描図像に見られる図像の造形的特徴と、図像を描き出す描線の特徴、描かれた図像そのもの、という三つの観点から同時期の著色仏画を捉えると、数多くの共通性が見出せることに気づいた。本研究でさらなる作品調査を行い、分析、考察を蓄積させることで、白描図像特有の様式観を確立し、絵仏師や画僧といった描き手の問題にも言及できるのではないかと考えた。

以上のように、白描図像を美術史的視点から捉えることで、白描歌仙絵や白描物語絵との比較検討が可能となり、白描画史のなかでの位置づけを明確にすることが出来るものと考えた。また、図像の優品が数多く生み出された平安時代後期においては、白描画の現存作例が少ないことから、本研究では著色されたやまと絵作例に留意することで、院政期以降の中世絵画史のなかで、白描図像の位置づけをも目指すものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の三点に集約される。

(1) 白描図像特有の様式を考察する

白描図像は油紙に墨線で描いたものが主流であり、著色仏画と比して圧倒的に情報量が少ない。さらには転写が繰り返されるなど、著色仏画とは異なる様式判断が必要とされる。ただ、個々の作例の紙質や描線などを丁寧に調査することで、様式観を提示することが可能と考えた。例えば「高僧図像」（仁和寺）と「十六善神図像」（東京国立博物館）のように、異なる図像を描いていても造形感覚や描線、紙質には共通性が認められる。さらに、奥書によって転写者が知られる作例もあり、学侶、画僧と絵仏師という描き手の差異、すなわち、絵画の素養の有無による表現の違いについても具体的に提起することが可能となる。

(2) 著色仏画との関連を考察する

諸先学の成果を踏まえ、白描図像との直接的な影響関係が認められる作例を検討し、白描図像を介した学侶、画僧、絵仏師の連携について具体例を提示する。白描図像には書写年代や転写者、図像の継承者が明記された基準作も数多く残されている。学侶、画僧、絵仏師の連携の実態を明らかにする重要な手がかりであり、著色仏画の空白を埋める資料群として、白描図像を仏教絵画史の中に位置づける。

(3) 白描画との関連を考察する

「鳥獣戯画」（高山寺蔵）と白描図像との関連は中野玄三氏をはじめ、諸先学によって指摘されて久しい。また、白描から水墨技法への展開についても田中一松、米澤嘉圃『白描画から水墨画への展開 水墨美術大系第一巻』（講談社、1975年）の中で概観されているが、既に40年以上の年月が経過しており、そこではあまり言及されることのなかった白描歌仙絵、白描物語絵にも視野を広げ、表現や図像の分析を行い、具体的な考察を試みる。

3. 研究の方法

上述した目的のため、本研究では作品調査と文献調査を軸に研究を遂行する。

(1) 作品調査

本研究は白描画像を表現様式の観点から捉えることが目的の一つであるため、可能な限り作品調査を行う。併せて、白描画像の造形感覚や描線の特色との類似が認められる著色仏画についても調査を行い、諸作例間での関連づけを行っていく。そうすることで、制作背景が異なる作例の間にも共通性を見出すことが可能となり、白描画像を介した有機的な結びつきが浮かび上がるものと考えられる。作品調査に当たっては、可能な限り撮影を行い、デジタル画像データの集積を行う。また、白描画像は、折り跡や裏書が認められものが多く、これらのデータの蓄積を丁寧に行うことで、現在諸家に分蔵される白描画像を多角的な視点で捉えることを試みる。

(2) 文献調査

文献史料の調査では、高山寺典籍文書総合調査団編『高山寺経蔵典籍文書目録』(東京大学出版会、1973年)、石山寺文化財総合調査団編『石山寺の研究 校倉聖教・古文書篇』(法蔵館、1981年)をはじめとした目録を利用し、調査対象とした白描画像の原所在を復元的に考察する。主要寺院間での画像の移動を分析することで、白描画像を介した学侶、画僧、絵仏師の連携について考察を試みる。また、公刊されている社寺関係資料や日記類から、仏画制作に関する項目を抽出し、分析することで、白描画像がどのように制作の場で活かされていたのかについて考察を行う。併せて、国文学の分野で近年急速に研究が進んでいる、唱導・説草史料も利用することにより、発願者や学侶が經典の規範に縛られず、いかなる基準で画像を選択し、仏画制作を行ったのかについても明らかになることが期待される。

4. 研究成果

(1) 本研究で得られた成果は以下の5点である。

白描画像の様式観について

本研究期間に調査を行った作品の分析を通じ、白描画像の描線には、程度の差はあるものの、肥瘦があり、打ち込みや払いの痕跡が残るといった特色を認めることが確認出来た。言い換えれば、何らかの意図を持たせるのではない、自然な筆運びによって表現された描線が特色である。この特色は、やまと絵作例に見られる、打ち込みや払いの痕跡を抑えた、均質で没個性的な描線と比較することで、よりいっそう明瞭となった。

画僧について

平安時代後半に活躍した覚禅(1143~1213頃)と玄証(1146~1222)という同時期の二人の画像家を起点とした画僧研究によって、白描画像を描き手の点から考察することが出来た。すなわち、画像を収集する際、自ら筆を執る事例もあれば、絵仏師との協働作業を行う事例もあり、一点一点の画像を丁寧に分析する必要が明らかとなった。本研究期間に行った作品調査から、自らが工房を主催するのではなく、流派や受法における師弟関係といった複層的なつながりを前提とするという、画僧の特色を明らかにすることが出来た。

さらに、代表者の所属機関で開催された、江戸時代の浄土宗の画僧である古カン(カンは石偏に間、以下同じ)をテーマとした特別展を担当したことによって、近世の画僧についても考察する機会に恵まれた点は特筆される。

中世白描画における画題と描線の相関性について

画像と同様に白描の手法によって描かれた歌仙絵や物語絵と、表現技法について比較検討するなかで、描線の特色と画題との間に一定の相関性があることを明らかにした。例えば白描歌仙絵の場合、「釈教三十六歌仙絵」(東京国立博物館ほか)のように仏門に関わる歌人が描かれる作例や、「治承三十六人歌合絵」(京都国立博物館ほか)のように撰者が僧侶の場合、貴頭の姿を描く描線とは異なり、打ち込みや払いの痕跡を残した、肥瘦のある、画像を想起させる描線によって歌人の姿が描き出されていた。一方、白描物語絵においても、「西行物語絵巻」(サントリー美術館)や「遊行上人縁起絵巻」(常称寺)のような僧侶を主体とする作例は、貴頭が登場する王朝物語とは異なる、画像と類似する描線が用いられたことを明らかにし、画題による描線の選択が行われた可能性を提示した。

「似絵」や水墨技法との関わりについて

鎌倉時代に流行した肖像表現である「似絵」は、陰影を付けず細かい描線を駆使して像主の特徴を描き出す点に特色がある。実在の、今を生きる貴頭の姿をどのような描線で描き出すのか、という点については院政期頃から試行錯誤がなされたと見られる。過去の歌人と同時代歌人を並列させる「時代不同歌合絵」にも関わる論点である。画像には同時代ではないものの、実在の祖師を描いた「高僧画像」があり、仕草や表情で描き分けを行っている。「似絵」の表現に画像が影響を与えた可能性を提起した。

また、白描画像に描かれた岩の描写には、墨の輪郭線だけでなく、面的な使用があり、水墨技法との関連が想起される。仏画における水墨技法受容の問題について、画像の重要性が確認出来た。

中世絵画史における白描画像の位置について

以上のように、本研究期間で得られた知見を踏まえると、院政期に画像の制作が活発となり、

上皇や天皇、貴族の関心を集め、観賞性が一気に高められたことで、やまと絵の表現の可能性を広げることになった可能性が高い。従って、院政期の白描画像の集積は、仏画のみならず、中世絵画を育む土台となる重要な位置を占めていたと考えられる。

(2) 今後の展望

国内外における位置づけとインパクト

中世絵画史における白描画像の重要性が改めて認識されたことで、現存作例の限られる平安時代の絵画を補完する重要な作品群となることが期待される。また、白描画像は断簡となって国内外の諸家に分蔵されており、その重要性が明らかとなることで、展覧会などでの積極的な公開が行われ、研究が進むことが期待される。

今後の展望

著色仏画を含めた個々の作例の検証から帰納する、白描画像を介した制作者、発願者のネットワーク、制作背景の解明は一部の作例に止まり課題が残された。今後も作品調査と考察を丁寧に行うことで、一点でも多くの作例について解明を試みたい。

また、画僧研究については、覚禅や玄証といった院政期の画像家だけでなく、古カンを中心とした近世の画僧にも視野を広げることが出来た。時代や地域、宗派による差異や共通性についての考察は今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

古川攝一、院政期の白描画における画像の位置 やまと絵白描画との関わりをめぐって、大和文華、査読無、135号、2019、pp.1-11

古川攝一、日蓮の肖像画 「水鏡御影」と「生御影」をめぐって、興風、査読無、30号、2018、pp.547-575

古川攝一、密教画僧の問題 覚禅・玄証を中心に、公益財団法人仏教美術研究上野記念財団研究報告書、査読無、第44冊、2018、pp.1-10

古川攝一、画僧古カンの仏画について、特別展「没後300年 画僧古カン」図録、査読無、2017、pp.160-168

古川攝一、中世白描画における画像・歌仙絵・物語絵の交差、特別展「白描の美 画像・歌仙・物語」図録、査読無、2017、pp.6-17

〔学会発表〕(計4件)

古川攝一、密教画像を語る 一意専心の芸術、第410回市民大学講座(会場:帝塚山大学)、2018

古川攝一、密教画僧の問題 覚禅・玄証を中心に、公益財団法人仏教美術研究上野記念財団研究発表と座談会「平安時代後期を中心とした絵師の工房をめぐる諸問題」(会場:京都国立博物館)、2017

古川攝一、中世白描画における画像の位置 やまと絵白描画との関わりをめぐって、美術史学会西支部大会「白描画再考 日本絵画史におけるその意義」(会場:大和文華館)、2017

古川攝一、Decoding a Buddhist painting from the Kamakura period、The Asian Studies Program in the Northern Arizona University (会場:アメリカ・北アリゾナ大学)、2016

〔その他〕

古川攝一、白描の美 画像・歌仙、「特別展 白描の美 画像・歌仙・物語」日曜美術講座(会場:大和文華館)、2017

古川攝一、描線の交歓 やまと絵白描画と画像、美のたより、No.197、2017、pp.5-6

古川攝一、弘法大師像(釈教三十六歌仙絵断簡)をめぐって、美のたより、no.193、2016、pp.9-10